

めでいかすどる  
Médicastre



「 スキー同好会 」

鶴岡地区医師会

18年3月

## 『めまい救急疾患の対応』

なかむら耳鼻咽喉科クリニック（神奈川県横須賀市）

院 長 中 村 正 先生

救急施設に限らず一般診療所を含む他の施設でも、救急のめまい患者を診察する機会は比較的多い。このような患者の大多数は対症療法だけでも症状の軽減が期待できる末梢性疾患であるが、中には迅速な対応を怠ると致死的な状態に陥る危険なめまいも含まれるので、慎重な対応が必要である。危険なめまいの多くは小脳脳幹部梗塞あるいは出血などの脳血管障害であるが、不整脈、低血糖発作、消化管出血なども含まれる。このような危険なめまい疾患を見逃さないことが救急診療の基本的スタンスである。

脳血管障害を否定するためにはCT・MRIは極めて有効であることには間違いはないが、一般診療所や救急外来など限られた状況のもとでは全例にCTやMRI検査を緊急的に行うことは現実的には困難である。また、実際に検査を行ってもめまいの責任病巣が明らかになる頻度は数%に過ぎないことなどを考えれば、ある程度のスクリーニングが必要であり、効率的に診断する診療技術が求められる。

救急のめまいを診断するためには、問診、神経学的検査および眼振検査が特に重要であるが、末梢性疾患と中枢性疾患との鑑別点を常に念頭に置き効率よく診断を進めることがコツである。神経症状などの随伴は脳循環障害などを疑わせる極めて有効な根拠になるが、実際には見逃しかねない極めて軽微な症状を持つ患者も多いので、どのような症例でも慎重に神経症状の有無を確認する慣習を常に持つことが大切である。また、糖尿病や高血圧などのリスクファクターを持つ患者では脳循環障害の率

が高いので特に留意する。

救急外来を訪れるめまい患者の大多数は、24時間以内に突然に発症した急性めまいである。その病態は一側性急性末梢前庭障害の場合が多いが、このような末梢性症例では強い回転性めまいと伴にほぼ例外なく定方向性に水平回旋混合性眼振を認める。また、体位変換で良性発作性頭位めまい症に典型的な眼振が誘発されればその診断は容易である。

眼振所見から、末梢性疾患であると確実に診断されれば危険なめまいである可能性は極めて少なくなるので、眼振を詳細に観察することの診断的意義は高い。一方、明らかな眼振所見がないのにもかかわらず、強いめまい感や平衡失調を来している症例では、むしろ危険なめまいの可能性が高くなる。このように、救急医療という限られた状況下でも容易に行える眼振検査は、救急めまいの診断には必須の検査法といえる。

救急医療におけるめまい患者の対応のポイントは、脳血管障害のような危険なめまいを見逃さないことにある。限られた状況下ですべての症例に詳細な検査を行うことは困難であることを踏まえれば、問診、神経学的検査や眼振検査等の重要性を理解し、効率のよい診療を行うことが診療の鍵となることを強調しておきたい。

## 三 師 会 抄 録

日時:平成 18 年 2 月 21 日(火)18:30～

場所:グランドエルサン

### 『 鶴岡市休日夜間診療所の利用状況と課題 』

鶴岡市健康福祉部健康課

課長 板 垣 博 氏

#### 【診療所の概要】

鶴岡市休日夜間診療所は、昭和 49 年 7 月、市内馬場町に休日診療所として開設され、58 年から夜間診療も開始している。管理運営は市の委託を受け「社団法人鶴岡地区休日夜間診療協議会」が行っている。

診療科は、内科、小児科、外科の 3 科で、特に小児科については医師会小児科医会のご協力により平成 16 年 10 月から、日曜日の午前中は小児科医が常駐する体制となっており、市民に大変喜ばれている。

診療日および診療時間は、日曜日・年始（1 月 1・2・3 日）が午前 9 時～正午、午後 1 時～5 時、午後 6 時～9 時。祝日（振替休日含む）・年末（12 月 31 日）が午後 1 時～5 時、午後 6 時～9 時で、医師は公立病院勤務医を除き 65 名の輪番制で、午前 2 名、午後 2 名、夜間 1 名から従事していただいている。

#### 【利用状況】

平成 16 年度の利用状況を見ると、開設日は 69 日で、総利用者数は 2,945 人（前年比 594 人増）、1 日平均利用者数は 42.7 人（前年比 8.6 人増）となっている。

科別利用者数は、内科系 963 人（32.7%）、小児科系 1,560 人（53.0%）、外科系 422 人（14.3%）と小児科系が半分以上となっている。年齢別に見ても 15 歳未満が 1,711 人と全体の 6 割近くを占めている。

他医療機関への紹介状況は、119 件中 111 件 93.3%が荘内病院への紹介となっている。

患者数が増加した要因は、平成 16 年 10 月から日曜日・年始期間の午前中小児専門医による診療が開始されたことにより、小児科の 10 月以降の患者数が大幅に増加したことと、2 月 3 月のインフルエンザの流行によるものとみている。

また、17 年 4 月からは完全院外処方を開始し、鶴岡地区薬剤師会のご協力で日中は市街地 2 か所・郊外地 1 か所、夜間 1 か所の休日当番薬局が対応している。4 月から 1 月までの実績では 2,213 件、1 日平均 37.5 件の件数となっている。

#### 【今後の課題等】

何といたっても施設の老朽化、狭隘化への対応が一番の課題。築後 30 年以上を経過しており、合併に伴う建設計画で計画されている「総合保健福祉センター」構想にあわせて検討したいと考えている。

また、現在、在宅歯科当番医制度で行われている休日歯科診療について、定点化の可能性も検討課題と思われる。院外処方の開始により使用薬剤の種類が増加しており、それに対する対応、増加する小児患者への対応、さらに、市町村合併により医療圏と行政圏がほぼ一致したことから、運営体制についての検討なども考えられ、多くの課題があるが、医師会、歯科医師会、薬剤師会の皆様方の絶大なご協力に感謝し、市民が健康で安心して暮らせるまちづくりのため、今後一層のご指導ご協力をお願いする次第です。

# 新荘内病院3年目を迎えるに当たって

—新病院の建設・現状・展望について— その1

鶴岡市立荘内病院院長

松原 要一

平成15年6月27日に創立90周年を迎えた荘内病院は同年7月1日に新病院へ移転・開院した。荘内病院将来構想から約15年目、新病院建設計画が動き出して8年目であった。新病院では既に2年8ヶ月経過したが、その経営・運営はほぼ想定内で順調だと思わる。

今回当院の新病院に関わるこれまでの経過を振り返り、当院の問題点および今後の方向性について検討したので、数回に分けて報告する。

## 新病院の建設について

### 1. 方針決定までの経過

昭和63年7月に病院将来構想検討委員会が設置されて新病院計画がスタートした。その後、平成3年9月に市議会の荘内病院建設等特別委員会の設置、平成5年8月に新荘内病院建設委員会の設置、平成7年9月に市長より新病院建設計画準備の指示を受け、平成8年4月に新病院建設準備室を開設した。以後、具体的な作業が開始され、同年12月に新荘内病院基本構想策定委員会の設置、平成9年10月に荘内病院整備基本構想が策定された。

その後、当時新潟県立吉田病院に診療部長兼外科部長として勤務していた私に新病院建設と新病院の運営・経営を任務とする院長の要請があった。同年12月末に初めて鶴岡に来て荘内病院を視察し、そして赴任することを決意した。ただし新潟の後任を決める必要があることなどから、赴任は平成11年4月からとし、平成10年4月から荘内病院に月1回出張して建設準備に参加することになった。

平成10年6月に整備基本構想を踏まえ、基本

設計に着手。平成11年3月に懸案の重大事項である新病院病床数を520床に決定した。

平成11年4月に11年計画の新院長として着任。同年5月荘内病院整備基本計画の策定後、基本計画を基に実施設計に着手した。

現在の新病院は最初の計画とは基本的な構想、例えば新病院の役割（急性期医療と災害・救急医療）、市街地での移転新築、主に財政面から逆算された病院規模と事業費の総額などは変わっていないが、組織・機能面ではかなりの部分で大きく変わった。これは、実施設計の段階での根本的な変更と具体的な対応について、この1年間で大筋を決めることができたことによる。その後の新病院開院までの約3年間は気の遠くなるような膨大な作業をすることになった。

### 2. 荘内病院の問題点

荘内病院は鶴岡地区人口約16万人を主な医療対象とする唯一の基幹病院であるが、以下の問題点が挙げられた（表1参照）。

- 1)ほかに急性期病院がない
- 2)入院・外来・救急すべての患者数が多い
- 3)医師数が少ない（10名以上不足）
- 4)赴任希望の医師が“いない”（関連大学の出張医師数が常勤医師数の約2/3を占める）
- 5)医療水準が上がらない（設備、診療単価）
- 6)病病・病診連携が進まない
- 7)ベッドが不足している
- 8)内部留保額（運転資金）が少ない
- 9)公立病院としての制約（単年度予算、情報公開、職員定員、業務委託、等）が多い

### 3. 新病院建設の問題点

新病院建設には以下の問題点が挙げられた。

- 1)鶴岡市（人口約 10 万人）の財政規模が小さく、総事業費用は市の財政能力から約 260 億円となり、90%以上は起債（借金）となる
- 2)医療機器整備費が少ない（予想の 1/2～2/3）
- 3)医師数が少ない（少なくとも 85 人は必要）
- 4)ベッド数を増やせない
- 5)入院・外来ともに患者数を増やせない
- 6)起債の返済（年約 12 億円を 30 年間）の当院分約 4 億円と経費の増大約 6 億円計 10 億円の年間負担増が見込まれる

#### 4. 新荘内病院の機能・役割

先ず、地域の基幹病院として何を為すべきかを明らかにすることが必要であった。

##### 1)機能・役割分担の内・外周知

「高度良質な急性期医療と災害医療を含む救急医療が中心の急性期病院」

##### 2)地域医療（情報）ネットワークの核となる

中核病院（地域医療連携、医療情報の共有、IT 化、統合医療情報システム）

##### 3)医師会活動と保健・福祉活動

##### 4)教育・研修・研究

##### 5)健全経営（運営の継続性）

#### 5. 新病院の対策

当院の置かれた状況認識より、新病院では起債の返済と経費増大に対する増収対策として診療単価を上げること、すなわち医療の質を変えることが絶対的条件と考えられた。そのためには、医師の増員、チーム医療の推進、病病・病診連携の推進が必要で、その鍵は IT 化と統合医療情報システムの採用であり、経費対策としての業務の効率化、すなわち業務委託が必要であろうとの結論に至った。

（開院までの当院の取り組みと新病院の内容については次回に続く）

表 1 平成 10 年度診療概要

一般病床：521 床（10 病棟）、17 診療科  
職員数 649 人（医師数 63 人、看護師 367 人、他）[定数 545 人]  
委託職員 34 人

入院患者数 17.6 万人 / 365 日（483 人 / 日）  
稼働率 92.6 %、平均在院日数 19 日、入院診療単価 33,015 円

外来患者数 33.1 万人 / 245 日（1,352 人 / 日）  
外来診療単価 7,755 円（外来院外処方完全実施開始）  
救急外来患者数 17,013 人 / 24 時間・365 日を含む

医業収益 86.23 億円、経常損益 +0.30 億円  
内部留保額 7.64 億円（平成 6 年：1.62 億円）

# 准看護学院第46回生卒業証書授与式

日 時：平成18年3月7日(火)13：30～

場 所：医師会3階講堂

大 滝 久美子

## 『答 辞』

61年ぶりの豪雪だった冬ようやく終わりを告げ、待ち遠しかった春の訪れを感じる今日この頃、私たち第46回生23名は鶴岡准看護学院を卒業する時迎えました。

学院長先生はじめ、諸先生方、並びにご来賓の皆様からお祝いと激励のお言葉を頂き、卒業生一同感謝の気持ちでいっぱいです。

思い起こせば2年前、准看護師を目指し、27名が入学いたしました。高校卒業後すぐに入学した者、社会に出て幾年経て学ぼうとして入学した者、それぞれ人生経験の異なる者同志が同じ教室で学ぶことに入学当初は戸惑いを感じていました。しかし、同じ目的を持つ者同士、看護の厳しさに悩み、立ち止まりくじけそうになった時、そこには必ずクラスメイトがいて励ましあいました。また厳しい指導の中にも温かく導いてくださった先生方がいたからこそ、23名が今日まで来ることができました。臨地実習は楽しいことばかりではなく、時には患者様の死に直面し、またある時は何一つできない自分に対し、自己嫌悪に陥る事もありました。現場の厳しさを目の当たりにして看護を職業とする者の責任の重さを痛感させられる日々でした。そのような時、看護師さんからのご指導や患者様からの温かい一言に支えられて喜びを得る事ができました。このような毎日の中で学校行事やクラスメイトとの語らいは心が和み、大きな楽しみでもありました。学習や研修旅行・親善体育大会などを通して、准看護師としての基礎知識や技術はもちろんのこと、看護師も1人の人間であること、そして常に自分を向上させるよう努力し、誰にでも陰日なく、思いやりの心を持つことの大切さを教えていただきました。私たちは誰一人として自分ひとりでここまで来られた者はいません。また、ここにいたるまで多くの者が涙を流しました。しかし、その涙があったからこそ、人の痛みや悲しみを知ることができ、自分の強さとなってここに立つことが出来たのだと思います。この困難を乗り越えることができたのは指導してくださった諸先生方をはじめ実習病院の方々、患者様や所属病医院の皆様そしていつも温かく見守ってくれた家族の支えがあったからです。心より感謝申し上げます。

最後に鶴岡准看護学院の益々のご発展と在校生の皆様のご健闘をお祈りして答辞とさせていただきます。



# 私のお勧めの店 その5

横山 靖

今回のお店は『メゾン・ド・なかむら』さん。ご紹介するまでもなく、鶴岡の洋食会をリードしてきた、みなさんご存知の名店である。

1958年オープンということだが、私が初めて父に連れてこられたのは、幼稚園で物心がつきはじめた頃だから、1964年あたりだろうか？そうすると、私はもう40年以上もこのお店に通いつめている。その当時はまだ昭和通りにお店があり、名前も『キッチン・なかむら』といていた。うちの父は、『キッチン・なかむら』さんがお気に入り、ことにステーキが大好きだった。『なかむら』さんのステーキを褒めるとき、よく引き合いに出すのが新潟のイタリア軒で、明治時代創業のイタリア軒といえば新潟のフランス料理の草分けであり、その当時は頂点の地位にあっただろう。私も覚えているが、イタリア軒ではステーキは座席の横に運ばれた鉄板のあるワゴンを使い眼前で調理された。最後にブランドでフランベされ、猛烈な炎に包まれ、そしてうやうやしくテーブルに供された。いかにも豪華な演出だったが、父は味の方は全く気に入らなかったようである。

その後はステーキの話になると、「イタリア軒は演出ばかりで『キッチン・なかむら』の方がはるかにおいしい」と話すのがクセだった。

しかし、私もこの評価は正当なものだと思っている。肉自体の熟成度、焼き加減、ソースどれをとっても申し分ない。米沢牛のフィレ・ステーキで5000円ほどだが、この味なら東京のステーキ店なら1万5000円ぐらいはするだろう。さらに『メゾン・ド・なかむら』さんで忘れてならないのが、小エビのグラタン。昔は、一般的な船型のグラタン皿に入っていた。今は平たいグラタン皿になっている。まずベシャメルソースの素晴らしさ！！を宣伝したい。この40年間に確実にベシャメルソースは進歩してきている。

もう完成の域だが他の店にはない、なんともいえ

ない芳香の秘密はなんだろう。おいしい表面の焼けたチーズの部分の下のベシャメルソースからは、熟成したブランドのような良い香りが漂ってくる。また小エビの背ワタがちゃんと取られていることも重要である。ささいなことのようにだが、こうした丁寧な下ごしらえが味を支えているのだ。逆にいえば、こんな基本的なこともしていないシロウトのような店のいかに多いことか。そうそう、牛テールの赤ワイン煮のことも書かなければならない。よ〜く煮込まれた牛のシッポの肉は繊維がほぐれてゆくような柔らかさで、やはりソースが絶妙にうまい。ただ、デートにはお勧めできない。フォークとナイフではどうしても、骨についたおいしい肉や軟骨のコラーゲン部分が残ってしまう。

これを食べ尽くすには骨を手づかみにして、口の周りをソースだらけにしてしゃぶらなければならないのだ。こんなことはできないという方には、タンの赤ワイン煮がお勧めだ。口の中でとろけるというのはこういうことを言うのであろう。

メゾン・ド・なかむら

住 所 鶴岡市本町1-5-3

TEL 0235-24-8708



# マイペット&マイホビー

- 第31回 -

佐藤元昭

思い出ばかりになりますが、私のホビーの一つは釣りで、小学生の時、梅雨の頃に海老を採って来る様に云われ、夕方磯蟹を潰して撒き、2、30匹のご海老を小さなたも網で採取し、日が落ちてから父と二人で懐中電燈をたよりに、燈台の下での天口（メバル）釣りに出かけたことが、忘れられない。静岡県富士市の旭化成診療所に出張していた頃、ガラス繊維で出来た竿にスピニングリールが付いている竿を見付け、早速買い求めるが、使用方法がよくわからないまま、近くの海岸で投釣を試した。所士富市の海岸は当時、製紙会社から流出した木の皮が沈んでいて、投げ方には失敗の連続、投げてあげるとその塵ばかり釣れて来ました。父母の老齢化により帰郷、すぐ新潟地震に遭遇し、診療所の一部が半壊し、中々釣りに熱中する暇がなく過ぎた。昭和42、3年より主に鼠ヶ関の海水浴場で、スピニングリール付の竿で遠投し、シノコダイ、キス、カレイ等を夢中に釣り上げていた。鶴岡の駅前の釣具屋ではじめてガラス繊維の中通し竿を見付け、更にカーボン繊維の竿と釣具が改良されて来ましたが、現在も現役で使用しているのは、中国製の短いガラス竿と中古で買ったカーボン竿です。平成4年の秋に軽度の脳梗塞で二週間入院し、退院後すぐ不全片麻痺が残っている時に、漁港の出入口の釣場にシノコダイ釣りに出かけた所、今は亡き石橋先生と一緒に隣で釣をしていた時、0.8号の釣竿に黒鯛が掛かり、石橋先生のたも網ですくい上げて下さいと御願した所、私が魚をすくいそこねたら悪いからと躊躇され、近くで見ていた若者にすくい上げてもらったことが思い出として残っています。最近5月頃からキス、7、8月にアジ、9月中旬頃より日曜ごと新潟県岩船港に出かけ、長年の釣の

感で場所を選び、特製の撒餌を用い、少し重い鉛をつけ生きた中海老をつけ、又は青イソメで秋の初めは港の浅い所、11、12月になると、深い所をねらって釣っています。今年の初釣は1月2日で強風とミズレに合い、フグ一匹でした。

又もう一つの私のホビーは写真です。医大専門課程の頃、中古の距離計のないブラックライカを買ってもらい、当時一緒に下宿していた熊本出身の教養課程の学生と、二階に住んでいた長崎出身で原爆で頸にケロイドのある米軍の妻を誘い、東横線の大倉山に出かけ写真（白黒）を撮ったのが始まりで、その後キャノンⅡD、ペンタックスSP、ニコン等写真を撮るより、機種性能に惚れ現在は写真庫の中は満杯の状態です。家の裏の海、雲、粟島、山北町の間々、家族、国道345号線沿線の四季、時刻によって変化する風景を撮るのが主です。毎年かならず撮る花（梨の花）は種より育て開花するまで約12年かかり、二本の内一本は枯れ、今ある木は、酒田などで栽培されている、刈屋梨の変種と思われます。様々な思い出ばかり頭の中に一杯詰まった、老人と云われる状態で生きている次第です。思い出話ばかりですみません。



# Introduction

## 勤 務 医 No.73

三 川 病 院  
精神科 中島隆明先生

初めまして。平成17年2月より三川病院に勤めています中島隆明と申します。

生まれは、旧八幡製鉄所で有名な？（若い人は殆ど知らないと思いますが）福岡県北九州市です。そこで海山にと自然（光化学スモッグも含め）を相手にとても楽しい幼少期を過ごし、中高時代は剣道部に入り一端の剣士きどりで、森田健作ばりに（これも古い話ですみません）下駄を履いて町中を闊歩したものです。

そんな青春時代を送っていましたが、なんとか日本大学医学部に入学し故郷を後にしました。

それからボクの輝かしい人生の一步が始まりました…と言いたいのですが、そうは問屋がおろしてくれません。

上京した“いなかっぺ大将”は大都会“花の東京”に圧倒され、自閉的生活を余儀なく送る羽目に陥りました。

しかし元来のお気楽性格もあり、なんとか東京の水にも慣れ、一年後には自然治癒したのですが、反動形成によりそのあと予期せぬ破滅的な人生が待ち受けていたのです。

酒とバラの日々…ならぬ、酒とマージャンの日々…

まるで刹那を絵に描いたような大学生活です。

毎日毎日、現実原則と快楽原則の狭間で葛藤に苛まれながらも、友人の心強い支えや、大学の深いお情けもあり何とか踏み留まる事ができ、青年期危機ものり越え、無事卒業に至りました。（本当に長かったナ〜）

そしてまた医局の諸先生方の寛大で慈悲深いご

助力の下でやっと社会的寛解までこぎつける事ができました。（アルコール依存症にも陥らず、賭博とも足を洗い…でもアルコール嗜癖は今なお頑固に残存していますが…）

そんなこんなで何とか精神科を続けて現在に至りますが、本当に周りの人達にも恵まれ、運（悪運といっても良いほどです）にも助けられたと心から感謝している昨今です。

こんな私ですが、これから新天地庄内で本当に微力ではありますが地域医療の一助になればと密かに思っております。これから公私とも宜しくお願いいたします。

P. S.

今はボーリングという趣味に出会い、はまっている毎日です。

ボーリング場で見かけたら、どうぞお気軽に声をかけて下さい、一緒にやりましょう。

# 同好会紹介

## スキー同好会

恒例の医師会スキー同好会の合宿が、3月の4日(土)と5日(日)の2日間にわたって湯殿山スキー場で行われました。今回で12回を重ねましたが、参加者が男性24名、女性9名の総勢33名で、これまでの最高人数となりました。

1日目は午前中は雪が降っていましたが、午後からは晴れ、また、2日目は朝から快晴に恵まれて、素晴らしいコンディションの中でスキーとスノーボードを満喫しました。

私は今年のこの合宿からスノーボードを始め、ちょうどこの日で歴1年を無事にむかえることができました。去年はゲレンデを転げ落ちながらなんとか滑っていましたが、今シーズン既に5回練習を重ね、皆さんの前でマックツイスト・720・バックフリップなどのBigAirを披露したいと、思いは大きかったのですがそこまでの上達には至らず、まだまだ人並みに滑れる程のレベルでなんとかスノーボードの皆さんに付いていきながら楽しむことができました。

お昼のバーベキューは当初は屋外の雪の上で行う



計画でしたが、雪が降っていたために予定を変更して、いつものクラブハウスの中で行いました。雪山を眺めながら食べたバーベキューの味は格別であり、また、ハイペースでジョッキの生ビールを飲み



干して真昼間から顔を紅らめていた先生もおられました。午後からはゲレンデに繰り出す人、クラブハウスの中でアルコール類を飲みながらみんなの滑りを見守る人、それぞれのスタイルですごしました。

宿泊は例年どおりの「なかだい」で、宴会は、夜の部のみの参加者も加わって、6時半から鈴木先生の乾杯でスタートしました。いつもながらの豊富な料理に舌鼓を打ちながらそれぞれの酒量も捗りました。全員の自己紹介あるいは日頃は職場を異にする職員同士の談笑を通じてお互いの交流が深まりました。二次会の後に、若手を中心として三次会が行われましたが、それが終わったのは深夜の1時過ぎでありました。

2日目は滑らずに朝食後に帰る人、時間を惜しんで夕方まで滑った人など様々でしたが、全員怪我なく合宿を終ることができて何よりでした。

最後に、多忙な日常業務の合い間を縫って合宿の準備と運営に当たられた幹事の皆さまに厚くお礼を申し上げます。

来年の合宿には、経験者も未経験者も大勢で参加しましょう。  
(管理課 阿部 勇樹)



**めでいかすとる**

## **表紙募集**

**写真、絵画、etc・・・医師会事務局まで**

～ 編集後記 ～

気象庁が43年ぶりに命名した「平成18年豪雪」も、このところの陽射しですっかり姿を消し、例年よりもむしろ早い春の兆しが漂っています。桜の開花も早まりそうだとのニュースが流れ、スギ花粉前線もそろそろ接近しているようです。

それに引き換え、4月からの診療報酬改定は、「花冷え」を思わせる様相です。過去最大のマイナス3.16%（内訳は、医師への技術料などの本体部分がマイナス1.36%、医薬品などの薬価部分がマイナス1.8%）の引き下げです。介護保険の見直しもあり、まさに医療界を取り巻く環境は、なかなか冬の時代が明けそうにありません。

このような状況に対し、我々ができることは、無駄のない良質な医療を提供することにより、国民の理解を得ていくことしかないように思えます。そのためにも、医療連携の重要性がますます高まっています。皆様のお手元に、3月23日開催の定時総会の案内が届いていることと思います。今回は役員改選もあり、4月からは新体制で、この厳しい状況への船出になります。最近、総会への会員の皆様の出席が少なく、大変残念に思います。活性化委員会でも、何とかこの状況を改善する方法を考え、なるべく予算等の議題にかかる時間を短縮し、会員の皆様のご意見を伺う時間を増やせるよう答申してきました。医師会の活性化は、すなわち、会員相互が協力し合い、良好な医療を提供することです。そして、総会は、会員の皆様が直接ご発言いただける唯一の場です。是非、多くの方にご出席いただき、たくさんのご意見を頂戴しながら、この厳しい状況に共に立ち向かっていきたいものです。

（福原晶子）

編集委員：伊藤末志・三原一郎・中村秀幸・石原 良・福原晶子

発行所：社団法人鶴岡地区医師会 山形県鶴岡市馬場町1-34

TEL 0235-22-0136 FAX 0235-25-0772 E-mail tsurumed@mwnet.or.jp

URL <http://www.mwnet.or.jp/~tsurumed/>

印刷所：富士印刷株式会社 鶴岡市美咲町27-1 TEL 22-0936(代)